

家庭基礎の学習と高校生の意識変容との関係

筒井 和美

武 文子*

青木 香保里

1. はじめに

家庭科は 1947 年 5 月に示された「学習指導要領家庭科編（試案）」¹⁾において「この教育は家庭内の仕事や家族関係に中心を置き、各人が家庭建設に責任をとることができるようにするのである。」と記され、新たな教科として位置づけられた科目である。義務教育の家庭科の年間授業時間数は 1998 年より小学校第 5 学年 60 時間、第 6 学年 55 時間²⁾、中学校第 1、2 学年 35 時間、第 3 学年 17.5 時間³⁾で、家族・家庭、衣食住、消費生活・環境の教育課程を網羅するには時間数が非常に不足している^{4) 5)}。高等学校では生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協議し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指しているが⁶⁾、高崎ら⁴⁾は特に家庭基礎（2 単位）で調理実習の平均回数が他の学校種よりも少なく、実習を行う上で「カリキュラム上の時間数が少ない」、「時間割の制約が大きい」、「人数が多くて指導が困難である」という現場の課題があると報告している。

近年、科学技術の進歩や産業の発達にともない、家電性能・加工食品の改良が重ねられ、人々の生活力は弱体化している。日景（2013）⁷⁾は調理に関する知識や技能の定着について学習指導要領改訂（1989）⁸⁾により小・中・高等学校を通して男女とも必修科目となった 1989 年と、約 20 年後の 2007 年に調査し、その結果を比較している。調理方法や献立に関する用語の知識定着について中学生、大学生ともに 2007 年調査の方が低い傾向にあり、家庭における調理経験の減少やライフスタイルの変容の影響が考えられると述べている⁷⁾。高校生は成人期にむけた生活スタイルのあり方を考え、将来にむけた健康維持への備えになる思考や行動の対応が必要である。特に肉類、牛乳・乳製品、野菜類の摂取頻度が低い者ほど精神健康度は低く⁹⁾、調理の技能技術の未習得が生活力の自立に及ぼす影響があると考えられ、生涯学習に与える家庭科の役割は大きいといえる。また、家族・家庭や高齢者に関する課題に関心を持ち、今後の暮らしを豊かにしていくための手助けをする必要がある。

そこで、本調査では高等学校の家庭基礎に注目し、愛知県の高校 1 年生は授業を通してどのような意識変容があったのか、好きな分野や感想などを記述した調査用紙から解析し、これからの授業内容に役立てることを目的とした。

* : 教職大学院 院生

2. 調査方法

2.1 家庭基礎の授業内容と学習指導計画

愛知県内の T 高等学校普通科 1 年生を対象とした家庭基礎において、2018 年度の一学期に自分らしく生きる、衣生活、二学期に食生活、保育、三学期に高齢者、消費生活、住生活の授業を行った。実習は調理実習 4 回、食品添加物実験 1 回、被服実習 5 時間、視聴覚授業 3 時間（妊婦体験スーツの着用を含む）とした。座学を主としたが、食料問題のグループ学習、自宅学習として調理や洗濯の手伝い、衣生活の調べ学習、子育てや高齢者へのインタビュー等にも取り組んでもらった。

学習指導計画について検討するため、平成 21 年度（2009 年度）改定の高等学校の家庭基礎の単元について教科書会社の指導例（東京書籍、開隆堂、大修館、教育図書、実教、第一学習社の計 14 冊）を参照し、単元の年間時数をそれぞれ調べ、平均値（ $n=14$ ）を求めた。これを基準値（100%）とし、2018 年度 T 高等学校普通科 家庭基礎の学習指導計画の各単元の年間時数がどの程度の配分であるかを調べた。

2.2 高校生を対象とした家庭基礎に関する紙面調査

対象者は T 高等学校普通科の高校 1 年生計 100 人（男子 50 人、女子 50 人）とした。家庭基礎に関する紙面調査を、調査用紙（資料 1）を用いて授業前の 2018 年 4 月、授業後の 2019

資料 1 家庭基礎に関する調査用紙

2018 年度 高校 家庭基礎に関する調査

① 家庭科の好きな分野について 1~4 個選んで記述してください。

	A 現在の 好きな分野	B 家庭基礎を学び終えて（2019 年 3 月）	
		好きな分野	感想・印象に残ったこと
家族・家庭			
保 育			
高齢者			
食生活			
衣生活			
住生活			
消費生活			

② 家庭科を学ぶにあたっての抱負（現在）

.....

③ 家庭基礎を学んでの全体の感想（2019 年 3 月）

.....

年 3 月に 2 回実施した。まず、授業前に①A 好きな分野、②抱負を記述してもらった。約 1 年後に再度、資料 1 を配布し、①B 好きな分野と印象に残ったこと、③全体の感想を記述してもらった。好きな分野は 1~4 個まで選択可とし、A 授業前、B 授業後に選択された分野を全体、性別でそれぞれ分けて集計し、授業効果を見るためカイ 2 乗で有意差検定を行った。また、授業前の②抱負、授業後の③全体の感想の記述から、知識、技術、関心意欲、活用の 4 種類にそれぞれ整理し、同様にカイ 2 乗で有意差検定を行い、授業後にどのような意識変容があったかを考察した。

2.3 倫理的配慮

本研究は学校名及び個人名が特定されることはなく、ベルモント・レポートの 3 つの基本倫理原則と研究実施への適用に考慮すべき要素も満たしている。T 高等学校の教頭に研究協力を依頼し、承諾を得た。

3. 結果と考察

3.1 家庭基礎の学習指導計画

図 1 に家庭基礎の教科書の平均提案授業時間数に対する T 高等学校の学習指導計画の割合を示した。「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ」が 160%と最も高く、次に「被服管理と着装」151%、「オリエンテーション」140%の順となった(図 1)。「住居と住生活」「食事と健康」はそれぞれ約 120%を示した。後述するが、「被服管理と着装」の授業時間数が平均提案数に比べて多く配分されており、その結果、特に、男子高校生の被服への関心が有意に($p<0.05$)増加したと推察された。なお、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ」と

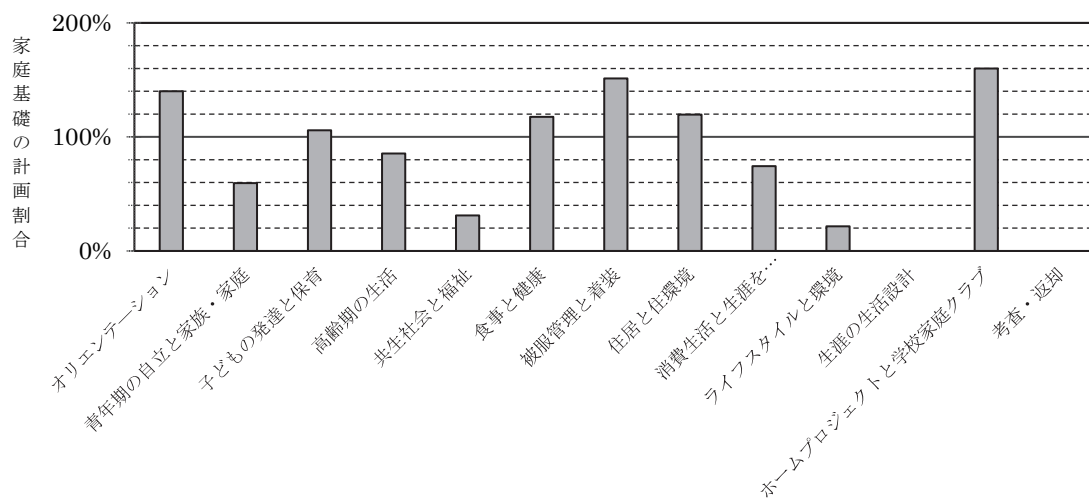


図 1 家庭基礎の教科書の平均提案授業時間数に対する T 高等学校の学習指導計画の割合

「オリエンテーション」については指導例に設定されていない場合があり、教科書の平均値が低く、割合は高くなった。

3.2 高校 1 年生の家庭科の「好きな分野」

高校 1 年生全体の好きな分野の結果を表 1-1、図 2-1 に示した。また、これに基づき男子生徒 (n=50) を表 1-2 及び図 2-2、女子生徒 (n=50) を表 1-3、図 2-3 にそれぞれ示した。好きな分野について問うと、家庭基礎の授業前は高校生 100 人中、食生活を選んだ者が 71 人 (71.0%) と最も多く、次いで保育 44 人 (44.0%)、住生活 28 人 (28.0%)、消費生活 26 人 (26.0%)、衣生活 19 人 (19.0%) の順になった (表 1-1、図 2-1)。その他の分野は生徒数の 9%以下を示し、特に、高齢者については 5 人 (5.0%) と極めて少なかった。しかし、授業後は食生活 77 人 (77.0%)、保育 58 人 (58.0%)、消費生活 37 人 (37.0%)、高齢者 34 人 (34.0%)、衣生活 34 人 (34.0%)、住生活 23 人 (23.0%)、家族・家庭 17 人 (17.0%) の順となり、いずれも増加した。食生活や保育は授業後も授業前と変わらず、好きな分野として多くの生徒を選び、特に、授業後に食生活を選んだ者のうち

表 1-1 高校 1 年生における家庭科の好きな分野の人数とその割合

全体 (n=100)	2018 年度		有意差
	授業前 [4 月]	授業後 [3 月]	
家族・家庭	9 (9.0)	17 (17.0)	
保育	44 (44.0)	58 (58.0)	
高齢者	5 (5.0)	34 (34.0)	$p<0.01$
食生活	71 (71.0)	77 (77.0)	
衣生活	19 (19.0)	34 (34.0)	$p<0.05$
住生活	28 (28.0)	23 (23.0)	
消費生活	26 (26.0)	37 (37.0)	
計 (複数回答数)	202	281	

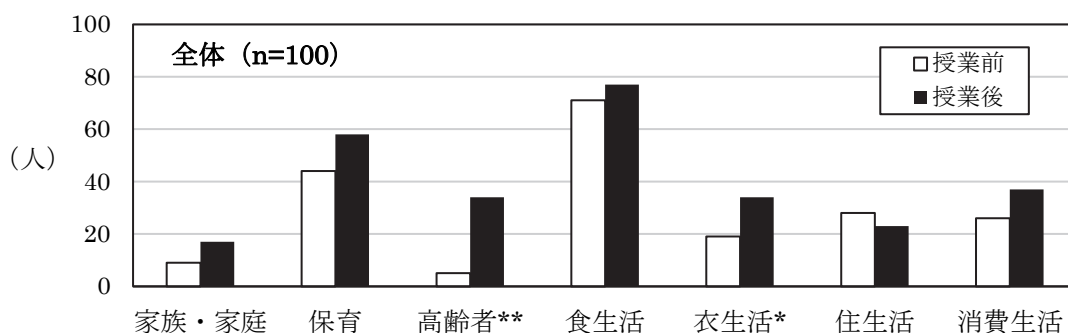


図 2-1 高校 1 年生の家庭科の好きな分野の人数

(* : $p<0.05$, ** : $p<0.01$)

77.9%が授業前と同じ者であった。また、高齢者と衣生活は授業後にいずれも有意に ($p<0.01$ または $p<0.05$) 高くなった。対象者の高校生も、実生活で体験しやすい調理実習を含む食生活を好きな分野として先行研究¹⁰⁾と同様に選択したと推察された。大学生の調理技術の習得度は低いため(大学調理教育研究グループ北九州(2012)¹¹⁾、筒井ら(2021)¹²⁾、筒井・浅野(印刷中)¹³⁾)、高等学校の家庭科の授業や日常の生活の中で、技能技術を習得する機会を増やしていく必要がある。また、実技をとまなう分野は教材内容の工夫やグループ学習によって、習得度や関心を高められる可能性があるため(筒井・綱木(2019)¹⁴⁾、筒井ら(2020)¹⁵⁾)、事前事後の学習の見直しが必要である。なお、資料1で好きな分野の数に幅があるため詳細を把握できなかったが、一人あたりの好きな分野の数は授業前 2.02 から授業後 2.81 へ増加し、授業の教育効果が現れた。

次に、高校生の性差の影響を見ると(表1-2、図2-2、表1-3、図2-3)、授業の有無に関わらず男女ともに食生活を好きな分野として選んだ者が70%前後存在した。保育を選択した割合は女子(n=50)の場合、授業前33人(66.0%)、授業後35人(70.0%)と変わらず高かったが、男子(n=50)は授業によって11人(22.0%)から23人(46.0%)

表 1-2 男子生徒における家庭科の好きな分野の人数とその割合

男子 (n=50)	2018 年度		有意差
	授業前 [4月]	授業後 [3月]	
家族・家庭	4 (8.0)	7 (14.0)	
保 育	11 (22.0)	23 (46.0)	$p<0.05$
高齢者	2 (4.0)	15 (30.0)	$p<0.05$
食生活	33 (66.0)	39 (78.0)	
衣生活	7 (14.0)	17 (34.0)	$p<0.05$
住生活	19 (38.0)	15 (30.0)	
消費生活	20 (40.0)	23 (46.0)	
計 (複数回答数)	96	139	

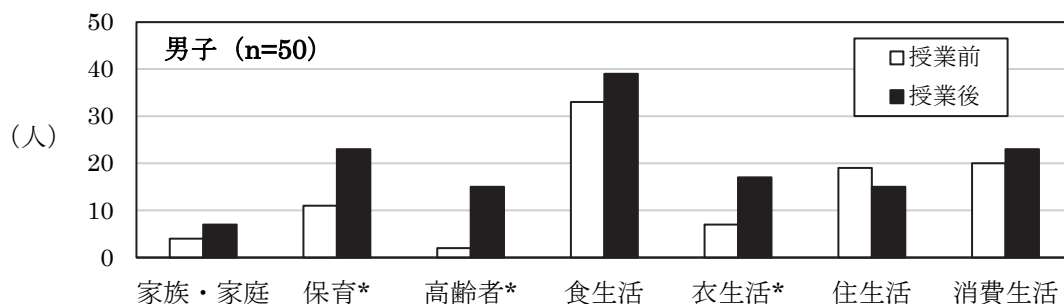


図 2-2 男子生徒における家庭科の好きな分野の人数

(* : $p<0.05$)

表 1-3 女子生徒における家庭科の好きな分野の人数とその割合

女子 (n=50)	2018 年度		有意差
	授業前 [4 月]	授業後 [3 月]	
家族・家庭	5 (10.0)	10 (20.0)	
保育	33 (66.0)	35 (70.0)	
高齢者	3 (6.0)	19 (38.0)	$p<0.01$
食生活	38 (76.0)	38 (76.0)	
衣生活	12 (24.0)	17 (34.0)	
住生活	9 (18.0)	8 (16.0)	
消費生活	6 (12.0)	14 (28.0)	$p<0.05$
計 (複数回答数)	106	141	

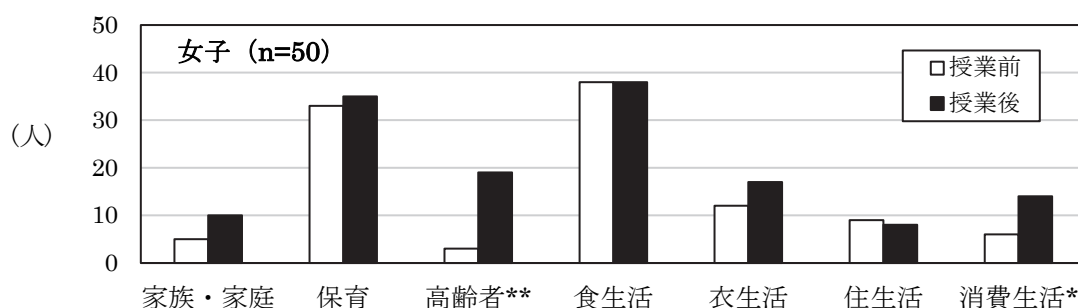


図 2-3 女子生徒における家庭科の好きな分野の人数

(* : $p<0.05$, ** : $p<0.01$)

へ有意に ($p<0.05$) 増加し、保育は食生活の次に好きな分野になった。前述した全体 (n=100) の結果と同様に、高齢者については男女ともに授業後に有意に ($p<0.05$ 又は $p<0.01$) 増加し、いずれも 30%以上に達した。住生活や消費生活については男子の方が、女子よりも授業の有無に関わらず、その割合は多かった。田中・内田 (2010) ¹⁶⁾ は衣食住の 3 つの領域について小学生、中学生、大学生を対象にアンケート調査を実施し家庭科の学習の定着度について明らかにしている。男女の定着度の比較では、小学生においては大きな差が認められなかったが、中学生、大学生においては男女差が大きいと述べている。今後は、好きな分野と定着度に正の関係があるのか検証していく必要がある。家族・家庭については男子の場合、授業前 4 人 (8.0%)、授業後 7 人 (14.0%) と倍増したが、その割合は他分野と比べてかなり低かった (表 1-2、図 2-2)。その要因の一つとして、生徒は子どもとして家庭生活を送っており、夫婦や親の立場が実感をもって捉えにくいため、好きな分野として選択されなかったと推察される。デート DV のような内容であれば身近に感じやすいが、人間関係や人権・平等などは他の分野に比べて抽象的で理解しにくいと考えられた。なお、消費生活に

数値や法律などの難しい点はあるが、女子の場合、授業後は授業前に比べて有意に ($p<0.05$) 関心が高くなった (表 1-3、図 2-3)。

次に、単元の授業時間数は教科書会社の平均値を下回ったが (図 1)、最も授業の影響を受けた高齢者の分野を取り挙げ、授業後に好きな分野として“高齢者”を選んだ高校生の感想・印象に残ったことの記述例を表 2 に整理した。近年の核家族化により、高校生にとって祖父母との同居率が低く、高齢者は身近な存在ではない。また自分と世代がかけ離れ、高齢になったらできることがなくなって役に立てなくなると感じている生徒もいる。授業で高齢社会の現状や高齢者の心身の特徴などの基本知識の学習と共に動画を鑑賞したり、可能な生徒は冬休みにインタビューをしたりする等の取り組みを行い、高齢者の方々が高齢期の不安を抱えながらも趣味や孫のことなどを日々の楽しみとしていることや、次の世代に何か伝えたいという思いが生きがいになることを学び、高齢者を理解し見守り高齢者から学ぶ視点が育ったと考えられる (表 2)。また、少子高齢化の現状や保険制度や福祉を学び、家庭と社会で高齢者を支えていくための方法を考え始めている生徒もいた (表 2)。

浅井 (2009)¹⁷⁾ は沖縄県の中学生を対象としたアンケート調査を実施し、学習経験の有無が高齢者役割認知に大きく影響を与えると述べているが、祖父母との同居率が男子 44.6%、女子 55.4%といずれも高く、沖縄県の中学生は情緒的援助、しつけ・社会化等について都市部と比べて理解が深いと推察される。また、小菅・布施谷 (2002)¹⁸⁾ は祖母と同

表 2 授業後に好きな分野として“高齢者”を選んだ高校生の感想・印象に残ったことの記述例

項目	感想・印象に残ったことの記述例
高齢者への理解・接し方	<ul style="list-style-type: none"> ・不自由さを知った。 ・動画で段差やお金を出す苦勞を知った。 ・自尊心を大切にする。 ・インタビューして高齢者のことを知れた。 ・介護法が知れてよかった。
高齢者への労り	<ul style="list-style-type: none"> ・身体が弱いから優しくしたい。 ・気持ちを理解したい。 ・祖父母を大切にしたい。 ・近所の人にも接したい。 ・寄り添い話を聞く。
知識経験の継承	<ul style="list-style-type: none"> ・経験・知識をつなぐべき。 ・インタビューの戦争体験
社会的視点	<ul style="list-style-type: none"> ・現状や課題を学び理解できた。 ・少子化について考える。 ・年金や介護の問題を考えた。 ・認知症や徘徊の対策が必要だ。

居している大学生は非同居に比べ、魚の摂取頻度、正月の雑煮を食べる回数が多い等、生活文化の伝承の一部が祖母との同居により担われていると述べ、家庭における高齢者の役割が大きいことがわかる。愛知県の雑煮は餅の形状が四角で、醤油で仕上げることが多いが¹⁹⁾、和食は平成 25 年（2013 年）にユネスコ無形文化遺産として登録されている^{20, 21)}。和食の保護・継承のためにも高齢者の分野を食生活、衣生活などと一緒に学習する機会を検討する必要がある。山川・倉盛（2002）²²⁾ は、高校生に高齢者との交流、特に文化の伝承や愛情（ほめられた）の経験や現在の交流があると肯定的な高齢者観があり、学習への関心も高いとしている。また、多様な背景の生徒もいることから、科学的認識を持って、高齢者との交流体験も含む学習活動に臨むべきであると指摘している²²⁾。今後は、このような社会的な背景を踏まえた高齢者や福祉の学習の構成を考え充実させる必要がある。

前述のように好きな分野として家族・家庭があまり選択されなかったため（表 1-1、図 2-1）、この分野の関心を高めるには「自立」について最初に取り組み、時期をずらして二学期の保育分野の前に移動させる方が、心の成長にもなって理解しやすくなるのではないかと考える。また、内容に漫画やドラマ、小説などを取り込み、具体的な心情理解につながるよう手助けをするのが望ましいと考える。綿引・河岸（2006）²³⁾ は家族学習の方法として、保育分野の心理劇を挙げている。自己と他者を客観的に捉え、他者を理解することや問題に適切に対応しようとする姿勢が見られたとしている。また、生徒の心に残るという点で参加意欲の向上に役立つが、適切なテーマ設定や事前学習により学びへとつながるとしている²³⁾。今後は、家族・保育・高齢者の分野の学習を行う場合には、心の問題や社会問題についての知識や経験を習得させた後、イメージ能力を活かし心情や役割理解を通して家族の課題に気づくことのできる、学習目標に添った授業設計に取り組む必要がある。

本調査より授業後の高校生に自己肯定感や発展性が見られたことから、環境やきっかけ次第で大きな成長につながると期待できる。様々な分野に関心を持ち、それらを融合させて総合的な視点から日常の暮らしの中にある生活の課題を見つけ、より多くの人々が豊かな生活が送れるよう、若い世代の人材を育成していくことが求められる。本調査の対象者はこれまでの家庭環境が異なるため、必ずしも異なる地域で同様の結果が得られるとは限らない。今後はより多くの生徒を対象に地域を広げて調査し、考察を深める必要がある。

3.3 高校生の意識変容

表 3 に、②授業前の抱負、③授業後の感想文から、それぞれ知識、技術、関心意欲、活用の 4 種類に整理した。全体を見ると、授業前は対象者（n=100）のうち活用が最も 55 人（55.0%）と多く、次に関心意欲が 36 人（36.0%）となった（表 3）。授業後は、これらは順に 79 人（79.0%）、59 人（59.0%）へと有意に（ $p<0.01$ ）増加し、それぞれ授業前の 1.44

表 3 家庭基礎の抱負、感想文に基づく知識、技術、関心意欲、活用の変容

人 (%)

全体 (n=100)	2018 年度		有意差
	②授業前 [4 月]	③授業後 [3 月]	
知識	21 (21.0)	29 (29.0)	
技術	30 (30.0)	14 (14.0)	$p<0.01$
関心意欲	36 (36.0)	59 (59.0)	$p<0.01$
活用	55 (55.0)	79 (79.0)	$p<0.01$
男子 (n=50)	②授業前 [4 月]	③授業後 [3 月]	
知識	12 (24.0)	17 (34.0)	
技術	14 (28.0)	5 (10.0)	$p<0.05$
関心意欲	21 (42.0)	29 (58.0)	
活用	24 (48.0)	39 (78.0)	$p<0.01$
女子 (n=50)	②授業前 [4 月]	③授業後 [3 月]	
知識	9 (18.0)	12 (24.0)	
技術	16 (32.0)	9 (18.0)	
関心意欲	15 (30.0)	30 (60.0)	$p<0.01$
活用	31 (62.0)	40 (80.0)	$p<0.05$

倍、1.64 倍に相当した。男女ともに活用は授業前、授業後ともに最も多かったが、いずれも授業後に有意に ($p<0.01$ 又は $p<0.05$) 増加した (表 3)。例えば、授業前後で男子 (n=50) が 24 人 (48.0%) から 39 人 (78.0%) へ、女子 (n=50) は 31 人 (62.0%) から 40 人 (80.0%) へ増加した。高校生の記述から読み取り分類したため、必ずしも全ての意図が項目と合致しているとは言い切れないが、関心意欲・活用の項目について有意差が認められたため、家庭科の学びを実生活に活かし、また、将来に役立てたいと感じた生徒が多かったといえる。本調査は家庭基礎の学習に注目したが、家庭総合の場合、さらに意識変容が発展的なものになるのか、今後、検証する必要がある。なお、男子 (n=50) の技術が 14 人 (28.0%) から 5 人 (10.0%) へ有意に ($p<0.05$) 減少した結果、全体 (n=100) の技術も有意に ($p<0.01$) 低下したといえる。

次に、高校生の意識が授業後にどのように変容したか、具体的な記述例を知識、技術、関心意欲、活用別に整理した (表 4)。2018 年 4 月、授業前の抱負として (技術) 「身近で家や他で使うため、しっかり学びたい」と記述した高校生は、授業後に学習により「色々な種類の料理ができたし、被服実習の作品のように他にも生かせるので「物づくり」は好き」と述べ、実習におけるものづくりの楽しさや面白さ、一つ一つの作業に深い意味を見出している (表 4)。家庭科の学びによって日常生活の仕組みに対する理解がより深まり、意識変容が見られた。(関心意欲)「忘れ物をせず、ノートを取る」と記述した者は、授業後、「住居

表 4 家庭基礎の抱負、感想文に関する記述例

	②授業前 [4月]	③授業後 [3月]
知識	<ul style="list-style-type: none"> 一人暮らしや自立に役立つ 期限を守り、授業中にメモを取る 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書を取っておいて大人になったら困らないようにしたい 身近で等身大で正しい知識を身につけられた
技術	<ul style="list-style-type: none"> 苦手だが将来必要 身近で家や他で使うため、しっかり学びたい 	<ul style="list-style-type: none"> 料理が苦手だったが、やってみようと思えてうれしい 色々な種類の料理ができたし、被服実習の作品は他にも生かせるので「物づくり」は好き
関心意欲	<ul style="list-style-type: none"> 衣、食、保、住に興味がある 好きになりたい 忘れ物をせず、ノートを取る 	<ul style="list-style-type: none"> 興味が高まった 一番楽しく好きになった 住居を詳しく知れて将来の夢の一步になった
活用	<ul style="list-style-type: none"> 物づくり（被服・調理）好き 料理に興味あり母の手伝いをしたい 未記入 得意ではないが、興味をもって全力で頑張る 	<ul style="list-style-type: none"> 人と関わって生きていくうえで大切。子育てしやすい社会に。高齢者とのかわりについて学んだ 親の大変さを知り、感謝したい。子どもや高齢者の接し方を知り助けてたい 誰もが幸せに暮らせるよう知識を活用する 知識や技術だけでなく、新たな価値観や行動を生み出すことを目指したい

を詳しく知れて将来の夢の一步になった」と述べ、家庭基礎の学習を通して得られた発見が進路や将来設計について考える機会となっている。さらに、(活用)「得意ではないが、興味をもって全力で頑張る」と抱負を述べた者は「知識・技術だけではなく、新たな価値観や行動を生み出すことを目指したい」としている。子どもや高齢者などの世話の必要な時期や人生を積み重ねてきた人々の立場を学ぶことで、関わりの意味を理解し、いたわりの気持ちが生まれてきた。このような意識変容が前述の家庭科の好きな分野の増加につながった(表 1-1、図 2-1)。

長澤(2003)²⁴⁾は家庭科の学習を通して役立ち感と楽しさの相乗効果を巧みに組み込むことが、生活主体者としての自立認識につながる役立ち感を培う上で効果的であると述べている。授業前には知識や技術を身につけることを意識していた生徒が多かったが、授業を

通じて知識や技術を学んだことで生活向上への関心が高まり、自立して活用し環境に働きかける意識へと変容している。家庭科での学びは身近な生活に関わる内容から、人として世界の一員としてどうあるべきかという、生き方、在り方を問われるような学びにつながることから、様々な学びと関わりのある重要な役割を持つといえる。

4. 要約

高校 1 年生は食生活、保育を好きな分野として選んでいたが、家庭基礎の学習により文化や伝統の継承、高齢社会などの発展的課題にまで関心を持つことができた。また、授業後には家庭科への関心意欲が高まり、それを日常生活に活用して将来の進路に役立てたいと思う等、意識変容がみられた。家庭科の授業時間数は少ないが、総授業時間数における各単元の時間配分について検討し、より多くの生徒たちに家庭科の重要性を理解してもらえよう働きかけが必要である。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、調査にご協力いただいた高校生やご支援下さった教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省 学習指導要領家庭科編 (試案) : 昭和 22 年 5 月 (1947)
<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s22ejh/index.htm> (アクセス日 : 2021 年 1 月 31 日)
- 2) 文部科学省 小学校学習指導要領 : 平成 29 年 3 月告示 (2017)
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf (アクセス日 : 2021 年 1 月 31 日)
- 3) 文部科学省 中学校学習指導要領 : 平成 29 年 3 月告示 (2017)
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf (アクセス日 : 2021 年 1 月 31 日)
- 4) 高崎禎子・齋藤美重子・河野公子 : 調理実習の実態と家庭科担当教員の意識調査結果からみる課題, 日本家庭科教育学会誌 **55** (3)、p. 172-182 (2012)
- 5) 川嶋かほる・小西史子・石井克枝・河村美穂・武田紀久子・武藤八恵子 : 調理実習における学習目標に対する教師の意識, 日本家庭科教育学会誌 **46** (3)、p. 216-225 (2003)
- 6) 文部科学省 : 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示)
https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf (アクセス日 : 2021 年 2 月 5 日)
- 7) 日景弥生 : 調理に関する知識や技能の定着における高等学校家庭科男女必修の影響 — 男女必修以前と必修後約 20 年経過時点での調査結果の比較を通して —、日本家庭科教育学会誌 **56**(1)、p. 23-34 (2013)

- 8) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成元年 3 月）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322503.htm（アクセス日：2020 年 5 月 22 日）
- 9) 富永美穂子・清水益治・森 敏昭・兒玉憲一・佐藤一精：中・高校生および大学生の食生活を中心とした生活習慣と精神的健康度の関係，日本家政学会誌 **52**（6）、p. 499-510（2001）
- 10) 速水多佳子・黒光貴峰：大学生の家庭科における調理、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題、日本家庭科教育学会誌 **57**（1）、p. 14-21（2014）
- 11) 大学調理教育研究グループ北九州：大学における調理実習教育の現状と担当教員の把握する学生の実態，日本調理科学会誌 **45**（4）、p. 255-264（2012）
- 12) 筒井和美・田岡奈々・杉浦美音：大学生の魚介類の煮物調理に関する実態調査、愛知教育大学家政教育講座紀要 **50**、p. 1-11（2021）
- 13) 筒井和美・浅野友花：調理技術の習得を目的とした蛇腹きゅうりの動画教材の開発とその活用、食生活研究（印刷中）
- 14) 筒井和美・綱木亮太：家庭科の調理実習における作業工程表の教育効果、食生活研究 **40**（1）、p. 49-67（2019）
- 15) 筒井和美・山田真子・綱木亮太・早瀬和利・加藤祥子：生活認識形成を意識した調理実習の献立作成とその教育効果 ～グループ学習の場合～、愛知教育大学研究報告 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編 **69**、p. 61-68（2020）
- 16) 田中志穂・内田恵美子：家庭科学習の定着度、教育実践総合センター研究紀要 **19**、53-59（2010）
- 17) 浅井玲子：沖縄の中学生が認知する高齢者役割 ―高齢者に関する学習経験と役割認知―、日本家庭科教育学会誌 **51**（4）、p. 284-290（2009）
- 18) 小菅充子・布施谷節子：三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望（IV） ―食生活と衣生活における祖母との同居・非同居の関連性―、和洋女子大学紀要家政系 **42**、p. 81-89（2002）
- 19) 筒井和美・岩本 恵・板倉厚一・辻岡和代・早瀬和利：愛知県の正月雑煮に関する一考察、愛知教育大学家政教育講座研究紀要 **42**、p. 43-48（2013）
- 20) 農林水産省：「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されました！
<https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/>（アクセス日：2021 年 2 月 1 日）
- 21) 文化庁：文化遺産データベース <https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/274122>
（アクセス日：2021 年 1 月 13 日）
- 22) 山川恵美・倉盛三知代：高等学校家庭科における福祉・高齢者学習についての一考察 ―高校生の高齢者観との関わりから―、和歌山大学教育学部紀要 教育科学 **53**、p. 137-150（2002）
- 23) 綿引伴子・河岸美穂：高等学校家庭科「保育」の授業で活用した心理劇の効果と課題、金沢大学教育学部紀要 教育学科編 **55**、p. 79-91（2006）
- 24) 長澤由喜子：高等学校家庭科の調理実習にみる役立ち感、日本家庭科教育学会誌 **46**（2）、p. 126-135（2003）